

令和4年2月22日 会頭記者会見 発言要旨

■京都経済の状況について

まん延防止等重点措置が延長された。今回のオミクロン株は、想定をはるかに上回るペースで拡大し、医療機関や教育現場、企業活動などあらゆる分野で、濃厚接触者の待機による人手不足が深刻となり、社会機能の維持に支障をきたしている。

今回の重点措置の延長で、観光関連産業を筆頭に、事業活動の制約が続く業種では、引き続き厳しい経営環境に追いつめられることになる。多くの企業でゼロゼロ融資の返済時期を迎える中、このまま需要の低迷が続けば、息切れによる倒産や廃業など、コロナ関連の破綻が増加するのではないかと懸念している。足元では、資源価格の上昇や人件費の増加など、コストの増加が幅広い業種で発生し、価格転嫁が進まない中小企業では、企業収益をじわじわと圧迫しつつある。

本所では、苦境に立つ中小企業を支援するため、経営の下支えを目的とする「事業復活支援金」の相談窓口を2月より開設し、会員・非会員を問わず対応にあたっている。さらに、環境の変化に対応したビジネスに転換すべく、「事業再構築補助金」や「小規模事業者持続化補助金」などを活用し、今年度は12月までで約1,100件の中小企業のチャレンジを支援してきた。また、先週、先々週と東京で開催されたギフトショーに、本所から出展した「あたらしきもの京都」では、内容の濃い商談が多く、成約金額は前年を大幅に上回る見込みと聞いている。変化するマーケットニーズをとらえて商品開発していく重要性和手ごたえを感じたところである。

本所では、影響が長引く中小企業の事業継続を下支えしつつ、収益力の改善に向けた挑戦の後押しに力を尽くしているが、政府においては、雇用調整助成金の4月以降の特例延長をはじめ、債務整理を含めた資金繰りの一層の支援を期待したい。

■本所のワクチン追加接種事業の実施について

感染対策を講じつつ社会経済活動を回していくため、ワクチン・検査パッケージを進化させ、活用していくことも大切だが、感染者を減らす上でも、いま、最大の対策はワクチンの追加接種の加速化だと考えている。本所でも、社会経済活動の正常化を後押しするため、この度、ワクチン接種事業を実施することにした。

昨年は、本所会員を対象に、8月から2か月間にわたって、約2,500会員、11,000名の中小企業の従業員等にワクチン接種を行い、「安心して仕事ができる」との喜びの声が多数寄せられた。できるだけ早期に実施したいが、職域接種では前回の接種から7か月の間隔をあける必要があり、4月11日から京都市と連携し、本所で接種を受けた方に、接種機会を提供する予定である。

ワクチン接種の加速化は、企業の事業継続のみならず、地域医療の負担軽減にもつながる。いささかなりとも、地域の接種計画の円滑な推進に貢献できればと考えている。

■「京都・知恵アントレ大賞」の新設について

この大賞は、社会課題の解決を図る有望な起業家を発掘し、集中的に支援することで、事業の成長を加速させるとともに、触発された、新たな起業家が次々と生み出されていく、“起業の好循環”を図ることを目的とする。これまで本所では、昨年度より京商イブニングピッチをはじめとした事業プレゼン会などを15回開催し、約60のスタートアップ企業が発表した。その中で、昆虫食の普及による食糧危機の改善や、AIのデータ生成技術による飛躍的な生産性の向上、多様な人々の社会参画を促すシステムやモノづくりなど、社会にインパクトを与える多くのプランが披露され、協業の機運が非常に高まっている。

この大賞では、そのような起業の芽をオール京都で支援すべく起業支援に実績のある産業支援機関だけでなく、ワコールホールディングスや京セラ、村田製作所など京都を代表する多くのグローバル企業が、サポーターとして参画することになった。それぞれの企業が持つリソースを活用しながら、テストマーケティングや実証実験など、製品やサービスの市場化を重点的に支援し、京都から世界に飛ばたくような企業の輩出に取り組んでいきたい。将来的には、この大賞がベンチャーの都・京都の復活に向けた起爆剤となるように育てていきたい。

■「京都・観光文化検定試験」について

2004年から実施している京都検定は、これまで延べ15万人の方々に受験いただいた。今年の7月の検定試験で20回の節目を迎えることから、記念事業として、御朱印帖付きの受験コースを新たに設けることとした。御朱印帖のデザインは、「難を転じる」として、テキストでも紹介されている「南天」柄に、京都検定のロゴをあしらったものを予定している。

公開テーマは、本所創立140周年を記念し、京都産業を発展へと導いた「琵琶湖疏水」に設定したほか、第21回の2級は文化庁の移転を見据えて「京の国宝」にするなど、より多くの方々に関心を持っていただける内容にしている。更なる京都ファンの掘り起こしに努めていきたいと思っておりますので、記者の皆様にも広報にご協力いただきたい。

以上